

「わたしたちは祝福の源」

～神の恵みを大胆に流す者となる～

「私たち福音を宣べ伝える者たちには、次から次へと悲しむべきことが起って来るが、心の深みにおいては、いつも生きる喜びにあふれており、財産らしいものは何一つ無かったが、多くの人々に測りがたいキリストの豊かな祝福を与えて富ませ、ほかの人たちのように持っているものは何も無くても、このささげきった生活には、神の恵みが、有形無形のあらゆるものと共に豊かに注がれたのである。」

コリント人への第二の手紙6章10節 [現代訳]

10連休のゴールデンウィーク終盤となりましたが、5月に入り、年号も「令和」となり、新天皇が即位なさいました。インターネットニュースに新天皇の素顔について少し表現されていました。サロン(床屋さん)でのご様子です。

「決して表には出されないが、殿下が孤独と向き合っていることを古中さんはつくづく感じている。お使いになるシャンプーの銘柄ひとつとってみても殿下には選択の自由がない。いらした時は、シャンプーの仕方を手取り足取りお伝えしたら『きちんと実践しています』と、来店しているときは本当にくつろいでいらっしゃいました。東宮御所での頭皮ケアを時間の許す限りご要望されていました。陛下にとって私たちが触れることは何より癒やされる時だったのではないかと思います」

皇太子の時とは比べ物にならないほどのプレッシャーをお感じになることと思います。私たちは憲法上象徴と呼ばれる微妙なお立場にある天皇陛下のために祈る必要があります。太平洋戦争の時に政府によって利用されたようなことには決してなってはならない。しかし、政治的権限が全くない状態になっている天皇陛下を守ることは国民の使命でもと感じます。政治家のためにも祈り、声を上げるべき時には声を上げることも必要であると感じます。自由がないのは、信仰についても同じことです。私たちには自由があっても、あの方々には自由がないのです。憲法における信教の自由は天皇陛下には当てはまらないのか？宗教的なお立場からは自由にされることはできないのか？それでは鳥かごの中の鳥です。

パウロは自由の身でありながら、自らキリストの奴隷として自分をキリストに捧げました。それは、強制的なものではなく、神の恵みによるものでした。喜んで自分をキリストという十字架に縛り付けたのです。神の恵みとはそれほどのものでした。新天皇陛下ご夫妻にもその神様の豊かな恵みを知っていただきたいと心から願います。雅子様には素晴らしいクリスチャンのご友人がおられて、アフリカのリバイバルされた教会のビデオを大川牧師経由でお渡しされ、大川牧師に宮内庁より「確かにお渡ししました」とのご連絡が来たとのことでした。それは大分以前になされた出来事ですが、確実に福音の種は蒔かれています。祈りましょう！